

報 告

高校生のための「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」の効果

千原 裕香, 西村真実子

〔論文要旨〕

本研究は、「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」には高校生の親世代になることに対する意識を高める効果があるのか明らかにすることを目的に実施した。A 県内で 2015 年度にプログラムを実施した 13 校の高校に在学する高校 1 年生 3,036 人を対象に、プログラム参加前後で親世代になることに対する意識尺度を用いた自記式質問紙調査を実施し、前後の得点を比較した。その結果、回収数 2,880 人で、有効回答数 2,382 人（有効回答率 82.7%）であった。プログラムを通して高校生は、子どもとの関わり方を理解し、子どもや子育てに対する関心や肯定的感情を高め、親と子の情緒的な結びつきを実感していた。また、半数以上の学校では、夫婦や社会で子育てする必要性を理解していた。一方、「安易な気持ちで子育てはできない」など親になることに対する心構えや意識を高めたり、「子育てに自信がない」など将来の子育てに対する不安が軽減する効果は確認できなかった。以上より、本プログラムには、高校生の親世代になることに対する意識が向上する効果が概ね認められたが、高校生が「親になること」について自分に引き寄せて考えられるように、乳幼児の親たちが高校生に子どもや子育てに関する経験を十分に話せるための工夫や、高校生が抱く将来の子育てに対する不安へのアプローチに課題があった。今後プログラムの効果への影響要因を検討し、アクションリサーチによる課題の検討が必要である。

Key words : 子ども虐待予防, 親になること, 高校生, 次世代育成教育

I. 目 的

児童虐待相談対応件数は年々増加の一途をたどり、令和元年度には 19 万 3,780 件と過去最多を記録し¹⁾、依然として社会全体で取り組むべき重要な課題となっている。この背景には、親になる前の「育児経験」や「子どもと関わった経験」が減少し、親になった時に育児不安に陥りやすい状況にあることが指摘されている²⁾。親としての資質は、子どもができて初めて身につくものではなく、幼少期からの体験の積み重ねによって少しずつ育まれ、発達していくものと考えられており、生育過程での乳幼児との接触体験の量や質、自分の成育歴への自己評価など過去の成育体験の影響が大きい³⁾と言われている。従来の日本は、きょうだ

いの上の子が下の子を保育し、下の子は上の子の子ども（甥や姪）を保育しというように、大人・人の子の親になるまでに育てられつつ育てる関係を生活の中で学んできていた⁴⁾。多くの子どもやさまざまな親子に触れ、そこから子どもや子育てに関する知識や技能を学習し、多様な子育ての価値観を知り、「親になること」について自然に考え、親としての資質を育むことができていた。しかし、現代の若者の乳幼児との接触体験は、平成 28 年の「青少年の体験活動等に関する実態調査」⁵⁾によると、一緒に遊ぶなどの体験はあるが、赤ちゃんのオムツを替えたりなどお世話をする経験はほとんどないことが報告されており、子どもが育つ過程に触れる機会が極めて少なくなり、「親になること」について考える機会もないまま親になり、子どもとの

関わり方に困惑し、育児不安や育児困難につながってしまうことが問題となっている⁶⁻⁸⁾。また、伊藤は、「親としての役割を果たすための資質だけではなく、親とならない場合であっても、社会の一員として備えておくべき資質⁹⁾と論じており、本稿では、親になる前の世代がもつ、段階的に形成される親としての資質を「親世代になるための資質」と表現する。

このような背景から近年、「親世代になるための資質」を育むための次世代育成教育の重要性が認識され、さまざまな取り組みが行われている。海外では、子どもたちの共感性を育むことを目的とした「Roots of Empathy」¹⁰⁾や高校生の子育てに対する知識の向上や子育ての責任に気づくことをねらいとした「The Parenting Curriculum」⁷⁾などが開発され成果を挙げている。日本においては2003年に次世代育成支援対策推進法が施行され、中高生が乳幼児とふれあう機会の拡充や世代間交流の推進が提唱され、家庭科の保育学習の中で保育園などに生徒が出向き乳幼児との関わりを中心に行う保育体験学習が行われている。保育体験学習の効果について、中谷が文献レビューを行っており、①肯定的な情動体験と意欲的な学び、②子どもへの関心と発達理解、③幼児のイメージの変化、④自己理解の深化と内面的成長の促進、⑤「子どもを育てる存在」としての成長促進に整理している²⁾。一方、幼児との関わりに比重が置かれやすく「子育て」の部分に触れる機会が少ない¹¹⁾との課題や、自分が「親になること」について具体的にイメージし、「親の役割を理解する」段階に至るためには学習内容や実施形態について検討していく必要がある²⁾との課題も指摘されている。また、千原らも青年期前期の親世代になるための資質は、子どもに関する【子どもとの関わりに対する意識】【子どもや子育てに対する関心・感情】、子育てに関する【夫婦や社会で子育てすることに対する意識】【子育てに対する不安】、親になることに関する【親になることに対する意識】、親子関係に関する【親子関係に対する意識】の要素から成っており、「親世代になるための資質」を高めるためには、子どもに関する意識を高めるだけでなく、子育てや親になることに関する意識を高める必要があることを見出している⁸⁾。乳幼児との関わりを中心に行う保育体験学習は、「子ども」に対する理解やイメージの変化を促す効果はあるが、将来の自分をより具体的にイメージし子育てや親になることについて考える機会となるためには

更なる工夫が必要であると考えられた。

そこで、青年期前期の親世代になるための資質を育むために、乳幼児だけでなくその親たちとも交流する「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」(通称：親子交流授業プログラム、以下プログラムと表記する)を考案した。今後、プログラムの発展と実施校拡大を図るためには、本プログラムには子どもに関する意識を高めるだけでなく、子育てや親になることに関する意識を高める効果があるのか明らかにする必要がある。そこで、本研究の目的は、本プログラムには高校生の親世代になるための意識を高める効果があるのか明らかにすることである。

II. 対象と方法

1. 「親子交流を通して親になることを考える」プログラムの概要

i. プログラムの対象者と実施体制

保育体験学習は中学生を対象に多く行われている²⁾が、高校生は「内省」する力が獲得される時期であり¹²⁾、自分の将来について具体的に考えはじめ、「親になること」について考えるという本プログラムのねらいに適した時期と考えられ、高校生を対象とした。

先行研究で実施手続きの煩雑さなどの要因から中学に比べ高校では子どもとのふれあいを取り入れた体験学習の実施率は低い¹³⁻¹⁵⁾との報告があり、多くの学校で実施するためには高校側の負担軽減がプログラム実施可能性を高めるために必要であると考えられた。そこで、プログラム実施体制の構築・運営を担当する行政機関(いしかわ結婚・子育て支援財団、以下、財団と表記する)、プログラム実施を担当する教育機関(高校家庭科教諭・I県高等学校教育研究会家庭部会)、高校生との交流に協力してくれる親子が安心して参加できるようにプログラム実施をサポートする福祉機関(NPO法人などの子育て支援団体、以下、子育て支援者と表記する)、プログラムの評価・改善・フィードバックを担当する研究機関(石川県立看護大学)の4機関で実施する体制を構築し、高校の負担軽減を図った。

ii. プログラムの構成

高校家庭科教諭がプログラム実施者となり、家庭科の授業の中で行われ、「事前授業」「交流授業」「事後授業」の順で3回の授業で構成された。1回の授業時間は約60分で約1か月の間で行われた。

a. プログラム実施に向けての準備と参加する乳幼児親子の確保

財団が、A 県内の全高校に対し本プログラムの実施希望校を募集した。

プログラムに参加する乳幼児親子は、財団からチラシなどを通じて公募した。募集の基準は、乳児～未就学児とその保護者とした。参加希望の親子には財団が運営する「ファミリーバンク」システムに登録してもらい、スマートフォンなどから参加申込みを求めた。参加が決定した親子には、家庭科教諭や子育て支援者らから事前オリエンテーションを行い、可能であれば抱っこなどの子どものお世話を生徒に体験させてほしいこと、子どもがぐずっても大丈夫でありその姿を生徒に見せてほしいことなどを伝えた。

b. 事前授業

事前授業では、交流授業に向けて子ども・子育て・親役割などへの関心・意欲を高めるための授業を行った子育てに関する新聞記事を読んだり、男女ペアで親になり子育て中の親の一日を考えるなど、生徒やクラスの実態に合わせた教材を用いて子どもや子育てへの理解を膨らませ、今回の交流授業で乳幼児の親たちに質問する内容を考えた。

c. 交流授業

約 5～10 組の乳幼児親子に高校に来てもらい、生徒約 5～6 人と親子 1～2 組で 1 グループとなり交流した。高校生は、親たちが子どもをお世話する様子を観察し、実際に抱っこしてあやすなどの子どものお世話を体験した。また、親たちが持参した母子手帳等を見せてもらいながら子どもや子育てに関する話を聞いた。交流授業には子育て支援団体スタッフである子育て支援者がサポーターとして参加し、高校生と乳幼児親子との交流が促されるよう高校生の様子を注意深く観察し、必要時具体的な説明を加え、乳幼児の気持ちを代弁し高校生に伝えた。また、同時に、親たちが高校生に子どもや子育てに関する経験を話しているか観察し、話し合いが止まっているグループがあればそこに入り親たちが話しやすいように支援した。先行研究で家族問題に葛藤を抱える生徒も多くなっていることから、家族や保育、育ちの振り返りの作業においては配慮が必要となると示唆されている²⁾。そのため家庭科教諭・子育て支援者から意図的に高校生に、乳幼児親子と交流する中で子どもが嫌いなどネガティブな感情も含めてどんな感情が湧いてきてもいいんだよというメッ

セージを伝えるよう配慮した。

d. 事後授業

交流授業終了後 1 週間以内に「事後授業」を実施した。事後授業では、交流授業での乳幼児親子との交流を通して、子どもや子育てに関する話を聞いてどう感じたか、あるいは「親になること」についてどう感じたか振り返り、インタビュー内容や感想を壁新聞風にまとめたり、クラスで共有したりした。

2. 対象施設と研究対象者

本プログラムの実施を希望した高校の中で、必修科目「家庭基礎」の授業としてプログラムを採用した高校を対象校とした。授業としてプログラムを実施するため、必修科目「家庭基礎」を履修する生徒は本プログラムに参加した。そのうち、質問紙調査に同意が得られたものを研究対象者とした。

3. データ収集方法

2015 年 9～10 月に無記名による自記式質問紙調査を行った。学校長の研究協力の承諾が得られた対象校の家庭科教諭に質問紙を郵送し、研究対象者への配布を依頼した。質問紙調査はプログラムの事前授業開始直前と事後授業終了後 1 週間以内の 2 回、集合形式で実施し、回答後は教室に設置した回収箱に投函するよう生徒に依頼した。

4. 調査内容

生徒の属性として性別、きょうだいの有無、祖父母との同居の有無、乳幼児との接触経験について尋ねた。

プログラムの評価指標として、「親世代になることに対する意識尺度」⁸⁾を使用した。この尺度は青年期前期の親世代になるための資質を捉える目的で作成された尺度で、6 下位尺度 33 項目で構成されている。その内容は、「子どもとの遊び方がわかる」など子どもとの関わり方の理解や認識に関する【子どもとの関わりに対する意識：5 項目】、「親子はお互いを必要とし合っている」など親と子の間の関係についての認識を問う【親子関係に対する意識：5 項目】、「安易な気持ちで子育てはできない」など親になることに対する心構えや意識に関する【親になることに対する意識：7 項目】、「男性が育児しやすい社会が必要である」などの項目からなる【夫婦や社会で子育てすることに対する意識：5 項目】、「子どもはかわいい」などの項目か

らなる【子どもや子育てに対する関心・感情：5項目】、「子育てできるか心配である」などの項目からなる【子育てに対する不安：6項目（全て逆転項目）】である。回答方法は「とてもそう思う（6点）」「そう思う（5点）」「少しそう思う（4点）」「あまりそう思わない（3点）」「そう思わない（2点）」「全くそう思わない（1点）」の6段階リッカート法で得点化され、各下位尺度得点で表される。各下位尺度のCronbach's α 係数は0.76から0.94で、信頼性と妥当性が確認されている。

5. 分析方法

親世代になることに対する意識尺度の各下位尺度得点を算出し記述統計と正規性の検定を実施、その後プログラム参加前後の各下位尺度得点の平均値の差の検定（対応のあるt検定）を実施した。また学校により生徒の背景やプログラム実施者が異なるため効果に違いがあるのか確認するために、属性に差があるのか χ^2 検定にて確認後、学校毎にプログラム参加前後の各下位尺度得点の平均値の差の検定を行った。本研究はサンプル数が多く、差の検定において有意であるという結果になりやすいため、 χ^2 検定では効果量Cramer's V を、対応のあるt検定では効果量 r を算出した。統計学的分析には、分析ソフトIBM SPSS Statistics Ver.26.0を使用した。

6. 倫理的配慮

本研究は石川県立看護大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：第725号）。A県内の高校の学校長宛てと家庭科教諭宛てに、プログラム参画依頼書と研究協力依頼書を郵送し文書による説明を行い、プログラム参画申出書兼研究協力同意書の提出をもって、学校長と家庭科教諭の同意を得た。研究対象者である高校生には文書にて研究目的、方法、個人の匿名性の保護、任意性の保障と不利益に対する配慮について説明し、質問紙の回答と回収をもって研究参加に同意が得られたものとした。家庭科教諭が質問紙を配布するため強制的にならないよう配慮し、調査は授業の課題ではないこと、成績には関係がないこと等を文書による説明と合わせて、家庭科教諭から口頭にて説明していただいた。また研究対象者は未成年であるため、保護者に対して文書による説明を行った。

Ⅲ. 結 果

1. 質問紙配布および回収状況

対象校は13校で、質問紙を配布した高校生は3,036人であった。回収数は2,880人（回収率94.8%）、そのうち親世代になることに対する意識尺度の項目に欠損値のない2,382人（有効回答率82.7%）を分析対象とした。

2. 研究対象者の特徴（表1, 2）

男子1,104人（46.3%）、女子1,277人（53.6%）で男女ほぼ同じ割合であった。きょうだいありと回答した者が2,122人（89.1%）と大半であった。祖父母と同居していない者の方が1,696人（73.9%）が多かった。乳幼児との接触経験に関しては、経験ありと回答した者は1,761人（73.9%）であったが、その頻度を見ると月1回以下が44.2%と最も多かった。学校別では、きょうだいの有無以外において分布に有意差が見られたが効果量は小さかった。

3. プログラム参加前後の下位尺度得点の比較（表3）

プログラム参加前と参加後における親世代になることに対する意識尺度の各下位尺度得点を比較した。

【子どもとの関わりに対する意識】はプログラム参加前に比べ参加後の得点の方が有意に高く効果量も大きかった。【親子関係に対する意識】、【子どもや子育てに対する関心・感情】においても同様に、参加前に比べ参加後の得点が有意に上昇しており効果量も中程度であった。【親になることに対する意識】は、参加前に比べ参加後の得点が有意に上昇していたが、効果量は小程度であった。同様に【夫婦や社会で子育てすることに対する意識】は参加前より参加後の得点が有意に上昇していたが、効果量は小程度であった。一方、【子育てに対する不安】は、参加前後の得点に有意差はなく不変であった。

4. 学校別にみたプログラム参加前後の下位尺度得点の比較

学校によりプログラムの効果に違いがあるのかを検討した。

【子どもとの関わりに対する意識】は、全ての学校でプログラム参加後の得点が参加前より有意に上昇しており、B校のみ効果量 $r=0.28$ と小程度であったが、

表 1 対象の属性

		n=2,382	
項目		人数	%
性別	男子	1,104	46.3
	女子	1,277	53.6
	不明	1	0.1
きょうだい	あり	2,122	89.1
	なし	260	10.9
祖父母との同居	あり	684	28.7
	なし	1,696	71.2
	不明	2	0.1
乳幼児との接触経験	あり	1,761	73.9
	毎日～週 1 回程度	430	18.1
	月 1～2 回程度	267	11.2
	月 1 回以下	1,053	44.2
	不明	11	0.5
	なし	615	25.8
	不明	6	0.3

それ以外の学校の効果量は中程度以上であった。

【親子関係に対する意識】は、全ての学校で参加後の得点が参加前より有意に上昇しており、J 校では効果量 $r=0.25$ と小さかったが、それ以外の学校の効果量は中程度以上であった。

【親になることに対する意識】では、D・G・K・M 校の 4 校で、参加後の得点が参加前より有意に上昇していたが、効果量は小程度であった。

【夫婦や社会で子育てすることに対する意識】は、B・C・D・H・I・L 校の 6 校で参加後に得点が有意に上昇し効果量も中程度以上あった。A・E・F・G 校の 4 校では、参加後の得点が参加前の得点より有意に上昇していたが、効果量は小さかった。

【子どもや子育てに対する関心・感情】は、全ての学校で参加後の得点が参加前より有意に上昇し、効果量も中程度以上であった。

【子育てに対する不安】は、E・F・I・M 校の 4 校で、参加後の得点が参加前より有意に高かったが、効果量は小さかった。その他の学校では有意差は見られず不変であった。

IV. 考 察

1. 「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」の効果

i 「子ども」への関わり方の理解と関心の高まり

保育体験学習は子どもへの好意感情や関心を高めることが明らかになっており^{16,17)}、本研究の結果より、本プログラムにおいても同様の効果が認められ、「子ど

表 2 学校別にみた生徒の属性

学校	A		B		C		D		E		F		G		H		I		J		K		L		M		χ ² 値	p 値	Cramer's V	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%				
人数	188	7.9	89	3.7	38	1.6	144	6.0	308	12.9	328	13.8	265	11.1	296	12.4	249	10.5	210	8.8	154	6.5	41	1.7	72	3.0				
性別	男子	71	38.0	46	51.7	21	55.3	65	45.1	149	48.4	137	41.8	129	48.7	182	61.5	104	41.8	106	50.5	36	23.4	22	53.7	36	50.0	76.2	.00**	.18
	女子	116	62.0	43	48.3	17	44.7	79	54.9	159	51.6	191	58.2	136	51.3	114	38.5	145	58.2	104	49.5	118	76.6	19	46.3	36	50.0			
きょうだい	あり	166	88.3	80	89.9	36	94.7	124	86.1	275	89.3	288	87.8	228	86.0	274	92.6	230	92.4	184	87.6	140	90.9	39	95.1	58	80.6	20.2	.63	.09
	なし	22	11.7	9	10.1	2	5.3	20	13.9	33	10.7	40	12.2	37	14.0	22	7.4	19	7.6	26	12.4	14	9.1	2	4.9	14	19.4			
祖父母との同居	あり	62	33.0	20	22.5	15	39.5	48	33.3	70	22.7	82	25.1	63	23.9	73	24.7	94	37.8	61	29.0	63	40.9	11	26.8	22	30.6	41.2	.00**	.13
	なし	126	67.0	69	77.5	23	60.5	96	66.7	238	77.3	245	74.9	201	76.1	223	75.3	155	62.2	149	71.0	91	59.1	30	73.2	50	69.4			
乳幼児との接触経験	あり	158	84.5	53	59.6	21	55.3	111	77.6	252	81.8	258	78.7	201	76.7	226	76.6	136	54.6	155	73.8	109	70.8	33	80.5	48	66.7	96.4	.00**	.20
	なし	29	15.5	36	40.4	17	44.7	32	22.4	56	18.2	70	21.3	61	23.3	69	23.4	113	45.4	55	26.2	45	29.2	8	19.5	24	33.3			

**p<.01, *p<.05

表3 プログラム参加前後における下位尺度得点の比較

下位尺度		平均得点	±SD	t 値	p 値	効果量 $r^{(注1)}$
子どもとの関わりに対する意識 (得点範囲: 5 ~ 30 点)	前	18.91	±5.44	29.47	.00**	.52
	後	21.13	±5.01			
親子関係に対する意識 (得点範囲: 5 ~ 30 点)	前	25.88	±4.15	23.98	.00**	.44
	後	27.53	±3.59			
親になることに対する意識 (得点範囲: 7 ~ 42 点)	前	36.43	±4.01	5.22	.00**	.11
	後	36.68	±4.24			
夫婦や社会で子育てすることに対する意識 (得点範囲: 5 ~ 30 点)	前	25.95	±3.65	12.72	.00**	.25
	後	26.7	±3.54			
子どもや子育てに対する関心・感情 (得点範囲: 5 ~ 30 点)	前	22.65	±5.77	24.78	.00**	.45
	後	24.34	±5.21			
子育てに対する不安 (得点範囲: 6 ~ 36 点)	前	18.08	±4.59	2.67	.08	.06
	後	18.31	±4.68			

注1) 効果量が中程度以上 ($r > .25$) を太字で示した
** $p < .01$, * $p < .05$

も」について理解し、関心を高めるために効果的な方法であったと考えられる。一方、佐々木らは1回だけの乳幼児との接触体験や体験の初期段階では否定的な感情を示したことを明らかにしており¹⁸⁾、単に子どもとの接触経験をもてばよいというものではなく、できるだけ肯定的な体験となるよう、十分な事前学習・準備・実施中の対応が必要であると述べている¹⁹⁾。本プログラムは1回だけの乳幼児親子との交流であったが、子どもや子育てへの関心や肯定的感情が高まっていた要因として、事前授業の中で子ども子育てについて学習したことや、否定的な感情を抱く生徒の存在にも留意し、交流授業中は子育て支援者が高校生と乳幼児親子との交流をサポートする体制や、ネガティブな感情も含めてどんな感情が湧いてきてもいいんだよというメッセージを伝えるなどの対応が行われたことが考えられる。

ii 親と子の情緒的な結びつきの実感

岡野は保育体験実習の教育効果として、「子どもを好きになる(第1段階)」、「育てられた自分を考え、育てる自分に思いを馳せる(第2段階)」を経て、「親の役割を理解する(第3段階)」に至ると述べ、単に子どもと交流して終わるのではなく、内容や形態を検討する必要がある²⁰⁾と述べ、澤田らは、子どもや子育てに対する若者の意識を育む上では、子どもとの接触体験だけでなく、子どもを育てる親との交流が重要な機会となる²¹⁾と述べている。生徒は本プログラムの中で、目の前で親子のやりとりをみるという体験を通して、親と子の間の感情の交流を感じとり、「親子はお互い

を必要とし合っている」などの親と子の情緒的な結びつきを実感していた。この体験により「子ども」だけではなく「親」にも焦点があたることで、「育てられた自分を考え、育てる自分に思いを馳せる」段階や、「親の役割を理解する」段階へと進むことが考えられる。

2. 「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」の今後の課題

澤田らは母子の様子を見るだけでなく、実際に子どもたちと関わり、母親から話を聞くことで、子どもや子育て、ひいてはその前に経験する結婚のことを自分に引きつけてより現実的に考える機会となった²¹⁾と報告している。本プログラムでも同様の体験を通して「安易な気持ちで子育てはできない」などの【親になることに対する意識】を高めることをねらったが、その効果は十分ではなく、親たちが十分に経験を話せるための工夫が必要であると考えられた。生徒が親たちの経験を引き出すような質問ができる工夫として、人生や過去の経験をインタビューする方法の一つであるライフストーリー・インタビューが考えられる。ライフストーリー・インタビューは、欧米においては調査法としてだけでなく、学校教育にも積極的に取り入れられ、世代間交流にも活用されており²²⁾、本プログラムにも有用と考えられる。

本プログラムは子育てに対する不安を軽減する効果も不十分であることが示唆された。服部らは、大学生が親子モデルを観察した時肯定的イメージが形成される一方、親になることへの不安感や否定的感情を生じ

ていた²³⁾と報告しており、本研究においても同様に、高校生は未経験の「親になること」を考えた時、肯定的な感情と否定的な感情が同時に湧き上がったことが考えられる。自分の生き方を模索する時期であり、親になる・ならないの選択自体がその模索の延長線上にある²⁴⁾高校生が、未知の子育てに対する不安を少しでも軽減するためには、子育てにも多様な価値観があることを知り、将来の選択肢が広がることが重要であると考えられる。そのために多様な価値観があることをプログラムの中で強調したり、Roots of Empathy プログラム¹⁰⁾のようにさまざまなタイプの親子と交流するなどの工夫が考えられる。

3. 本研究の限界と課題

本研究は、単一対象実験デザインで対照群を設定せずにプログラムの効果を検証した。そのため通常の高校家庭科の授業を受けた生徒などを対照群とし比較を行うことでより本プログラムの効果や課題が明確にできると考える。本研究の結果、約半数の学校で夫婦や社会で子育てすることに対する意識が高まっていたが、効果が不十分だった学校もあった。学校によりプログラム実施者が異なっていたため、プログラム実施者の経験やプログラム作成への関与の程度によりプログラムのねらいの理解度に差が生じ、生徒への教育効果に差が現れ、結果に影響が与えた可能性は否めない。プログラム実施者側の要因だけでなく、生徒の属性や背景など生徒側の要因、乳幼児の親子側の要因なども影響していることが考えられ、詳細に検討していく必要がある。今後、プログラムの課題解決に向けて研究者とプログラム実施者が研究に参加し試行錯誤を重ねながら作業を進めていく中で、実践的な知識を生み出し現場に変化をもたらすことを目指すアクションリサーチなどを取り入れて研究を進めていくことが適していると考えられる。

V. 結 論

「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」を通して高校生は、子どもとの関わり方を理解し、子どもや子育てに対する関心や肯定的感情が高まり、親と子の情緒的な結びつきを実感していた。また半数以上の学校で、夫婦や社会で子育てする必要性を理解しており、本プログラムには、高校生の親世代になることに対する意識が向上する効果が概ね認められた。

一方、親になることに対する意識を高める効果や、将来の子育てに対する不安を軽減する効果はみられず、乳幼児の親たちが子どもや子育てに関する経験を十分に話せるための工夫や、高校生が抱く将来の子育てに対する不安へのアプローチに課題があることが示唆された。

謝 辞

本研究のためにご協力くださいました対象校の関係者の方々や研究対象者の皆様、プログラム検討会の皆様、公益財団法人いしかわ結婚・子育て支援財団の山本康人様に心から感謝申し上げます。

本研究は公益財団法人いしかわ結婚・子育て支援財団からの受託研究として行われた。また本研究は石川県立看護大学大学院看護学研究科看護学専攻博士前期課程における修士論文の一部を改変したものである。本研究の一部は、日本子ども虐待防止学会第 23 回学術集会ちば大会にて発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 厚生労働省. “令和元年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数”. <https://www.mhlw.go.jp/content/000696156.pdf> (参照 2021.05.18)
- 2) 中谷奈津子. 親性準備性にむけた「保育体験」における効果: 文献レビューからみる小・中・高家庭科教育. 大阪府立大学紀要 (人文・社会科学) 2016; 64: 37-49.
- 3) 中野由美子. 生育体験の次世代育成力への影響—性差と保育実習体験の効果—. 目白大学総合科学研究 2008; (4): 119-128.
- 4) 金田利子. 育てられている時代に育てることを学ぶ. 東京: 新読書者, 2004.
- 5) 独立行政法人国立青少年教育振興機構. “「青少年の体験活動等に関する実態調査 (平成 26 年度調査)」資料集”. <http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/107/File/zentai2-min.pdf> (参照 2021.05.18)
- 6) 岡本祐子, 古賀真紀子. 青年の「親準備性」の概念の再検討とその発達に関連する要因の分析. 広島大学心理学研究/広島大学大学院教育学研究科心理学講座編 2004; 4: 159-172.
- 7) Sasso TK, Williams SK. The effectiveness of the curriculum: an evaluation of high school students'

- questionnaire responses. *Fam Consum Sci Res J* 2002; 20(2): 1-11.
- 8) 千原裕香, 西村真実子, 成田みぎわ, 他. 青年期前期における「親世代になることに対する意識尺度」の作成と信頼性・妥当性の検討. *日本看護科学会誌* 2019; 39: 211-220.
 - 9) 伊藤葉子. 中・高校生の「子どものイメージ」の発達. *千葉大学教育学部紀要* 2005; 53: 85-90.
 - 10) Gordon M. Roots of empathy: responsive parenting, caring societies. *Keio J Med* 2003; 52(4): 236-243.
 - 11) 小島康生, 水野里恵, 塚田みちる. 高校生を対象とした赤ちゃんとのふれあい体験実習の効果—赤ちゃんイメージと子ども・子育て観における変化—. *中京大学心理学研究科・心理学部紀要* 2011; 11(1): 15-27.
 - 12) 小野善郎, 保坂 亨. 移行支援としての高校教育—思春期の発達支援からみた高校養育改革への提言—. 東京: 福村出版, 2012.
 - 13) 伊藤葉子. 中高生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討. *日家政会誌* 2007; 58(6): 315-326.
 - 14) 尾城千鶴, 吉川はる奈. 高等学校「家庭科」における保育体験学習の教育的効果と課題. *埼玉大学紀要教育学部* 2010; 59(2): 59-67.
 - 15) 下野恵里子, 今村光章. 岐阜県下の高等学校家庭科における保育体験学習の実施状況に関する調査報告. *岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究* 2012; 14(1): 23-32.
 - 16) 岡田みゆき. 生徒が子どもや子育てに対して明確なイメージをもてるための高等学校家庭科における授業実践. *日本家庭科教育学会誌* 2006; 49(2): 123-133.
 - 17) 藤後悦子. 家庭科教育「保育」研究における動向. *日本家庭科教育学会誌* 2004; 47(2): 106-115.
 - 18) 佐々木綾子, 小坂浩隆, 末原君美代, 他. 親性育成のための基礎研究 (2) —青年期男女における乳幼児との継続接触体験の心理・生理・脳科学的指標による男女差の評価—. *母性衛生* 2010; 51(2): 406-415.
 - 19) 佐々木綾子, 末松紀美代, 町浦美智子. 青年期男女の親性を育てる乳幼児との継続接触体験の内容分析による評価 (第1報). *思春期学* 2009; 27(3): 270-282.
 - 20) 岡野雅子. 中学生・高校生の保育体験学習に関する一考察—幼稚園・保育所側から見た課題—. *信州大学教育学部紀要* 2006; 117: 25-36.
 - 21) 澤田英三, 上手由香, 奥野雅子. 保育体験は女子大学生の子ども観・子育て観をどのように変えるのか? *安田女子大学紀要* 2013; 41: 103-114.
 - 22) 中川恵里子. ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性. *生涯学習基盤経営研究* 2010; 34: 99-112.
 - 23) 服部律子, 後藤宗理, 中嶋文子, 他. 大学生男女が親になることについて考えるきっかけ. *椋山女学園大学看護学研究* 2009; 1: 97-105.
 - 24) 伊藤葉子. 中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習. *日本家政学会誌* 2019; 70(6): 321-327.

[Summary]

This study aimed to investigate the effects of “The Think about Becoming a Parent” program for high school students. An anonymous questionnaire survey was administered to 3,036 high school students who had completed the 2015 “The Think about Becoming a Parent” program implemented in 13 high schools. The questionnaires were administered two times: a immediately before the program, and immediately after the program. Attributes and a scale for Adolescent Awareness of Becoming a Parental Generation (comprising 33 items) were surveyed. We conducted a paired t-test. The number of responses collected was 2,880, and only 2,381 (response rate: 82.7%) of them were valid. Participants’ scores on the subscales “awareness of relationships with children”, “interest and feelings toward children and child-rearing” and “awareness of parent-child relationships” significantly increased. Their awareness of parenting with a couple and within society was increased in half of the participating schools. Their awareness of becoming a parent and their anxiety about parenting remained almost unchanged. Therefore, there were issues on ways to enhance the discussion between high school students and parents of infants and children in exchange classes and on approaches to address anxiety about future child care among high school students at the thought of becoming a parent. In the future, these issues should be addressed by incorporating an action research.

Key words: child abuse prevention, becoming a parent, high school student, parenthood education